

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 25 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21330125

研究課題名（和文） ポピュラー・カルチャーにおける戦争体験の断絶と継承をめぐる比較メディア論的研究

研究課題名（英文） Media studies on war experiences in postwar popular culture

研究代表者

福間 良明（Fukuma Yoshiaki）

立命館大学・産業社会学部・准教授

研究者番号：70380144

研究成果の概要（和文）：

本研究では、戦後の大衆的なメディアに焦点を当てながら、大衆文化にあらわれる戦争体験の継承と断絶の変容について、考察してきた。具体的には、個々の大衆メディア（映画、テレビ、マンガ、戦跡・資料館）における「戦争体験」を比較対照し、そこにおける戦争理解やその社会背景について考察した。なお、そのうえでは、沖縄、広島、長崎、グアム（大宮島）など、戦場ごとの描写の相違にも注意を払った。

研究成果の概要（英文）：

This research focused on the history of popular culture in postwar Japan, and examined transformation of recognition on war. We analyzed the discourses and representations in media, such as movie, television, comic, tourism, therefore we studied about the viewpoints of war experience in each media and social background of them. We paid attention to the diversity of representation of each battlefield (Oinawa, Hiroshima, Nagasaki, Guam(Omiyajima), and so on).

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	4,100,000	1,230,000	5,330,000
2010年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
2011年度	2,100,000	630,000	2,730,000
年度			
年度			
総計	9,700,000	2,910,000	12,610,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：戦後沖縄, 戦争体験, 輿論, 雑誌

1. 研究開始当初の背景

戦争体験論や戦争の記憶をめぐる研究は盛り上がりを見せる一方、個々のメディアの機能とそこにおける「戦争」描写の関係性は解き明かされていなかった。

2. 研究の目的

上記の問題意識から、本研究では、マンガ、映画、テレビ、観光における戦争体験の描写を分析することを目的として、作業を進めた。

その際には、広島、沖縄、長崎、グアムなど個々の戦場（戦争）のメディアごとの位置づけの相違についても考察を行った。

3. 研究の方法

映画、マンガ、番組、旅行ガイドブック等のメディア資料の言説・表象分析を進めるとともに、記念館や戦跡観光の変化についても調査を行った。

4. 研究成果

マンガ、観光、映画、地方サークル誌などにおける戦争体験の位置づけの変容やねじれについて、メディア史研究・ポピュラーカルチャー研究の観点から考察を行った。その成果は、共同研究メンバーの個々の論文のほか、共著『複数の「ヒロシマ」：記憶の戦後史とメディアの力学』（青弓社、2012年6月）等において、公表した。具体的には以下のとおりである。

今日の「ヒロシマ」という語には、「被爆体験」「原水爆禁止」「反戦・平和」「反原発」といったものが、混然と込められている。それはあたかも、一九四五年八月六日の経験に根ざしているかのように捉えられる。だが、「ヒロシマ」をめぐる言説は、つねにそのようにあったわけではない。時代や社会状況の関わりのなかで、祝祭的な高揚感や「平和利用」の希望に結びついたり、政治主義的な理念への嫌悪を思い起こさせることもあった。「ヒロシマ」はひとつの語義に収斂されるものではなく、複数の語りが存在してきたのである。

広島の被爆体験を扱った書物はこれまでに多く発刊されてきた。それに根ざした反核の主張にも膨大な蓄積がある。だが、「ヒロシマ」はこれまでにメディアにおいていかに語られてきたのか、言い換えれば、「ヒロシマ」はいかに欲望されてきたのかという問いについては、じつはさほど検証や整理が進んでいないのではないだろうか。

たしかに、一九九〇年代以降、ポスト・コロニアル研究やカルチュラル・スタディーズの伸長とともに、広島の記憶を問い直す議論は盛り上がりを見せるようになった。福島原発事故以後、それらと「平和利用」の接合を批判的に論じる動きもないわけではない。しかし、記憶をめぐる「欲望」が少なからず指摘されてきた一方、「なぜ、そのような記憶が紡がれざるを得なかったのか」という点にどれほど分け入ってきたのかという点、そこには限りもあったように思われる。

現在の観点から過去の記憶を批判することにも、一定の意義は認められよう。だが、「欲望」批判がそれなりに積み上げられてきた一方、「欲望を生み出すメカニズム」はど

れほど捉えられてきたのだろうか。さらに言えば、「欲望の批判」が、その「欲望」に仮託せざるを得なかった意図や心情を見失わせることにもならないだろうか。それらが生み出さざるを得ない社会的磁場に分け入らねば見えないものも、少なくはないように思う。

「フクシマ」との関連で、「ヒロシマ」はますます多く論じられつつある。だが、そこから一步退いて、「ヒロシマ」を論じる磁場自体を問い直すことも、無益ではあるまい。それは同時に、「フクシマ」を語ろうとしているわれわれの足元を問い直すことになるのではないだろうか。

<記憶・欲望・メディア>

このような問題意識のもと、本書は戦後メディアにおける「ヒロシマ」の言説や表象を検討する。といっても、本書は新聞・雑誌等の活字メディアに特化するわけではない。むしろ、映画やマンガ、観光といったポピュラー・カルチャーを多く扱った。

たしかに、活字メディアにおいて、「ヒロシマ」は多く論じられてきた。だが、人々の「ヒロシマ」イメージがそれだけで紡がれてきたわけではない。中沢啓治『はだしのゲン』、こうの史代『夕凧の街・桜の国』のインパクトは無視できるものではない。また、被爆体験を扱った映画『原爆の子』『黒い雨』のほか、「核」の問題を念頭に置いた映画『ゴジラ』等の特撮映画も、国民的記憶を紡ぐうえで、重要な役割を果たしてきた。

観光の影響力は、それに勝るとも劣らないものがあるだろう。広島平和記念資料館や平和公園、原爆ドームが観光地として整備され、修学旅行の目的地として組み込まれることも少なくない。それまで、さして「ヒロシマ」に興味を持たなかった生徒たちが、これを機に関心を深めることもしばしばである。

だとしたら、これら観光も含むポピュラー・カルチャーにおいて、「ヒロシマ」はいかに語られてきたのか。そこには、いかなる社会的な背景や力学が作動していたのか。本書では、そうした点について検証した。

ここで、「ヒロシマ」という語について、説明を加えておきたい。先に記したように、「ヒロシマ」という語から連想されるものはさまざまである。被爆体験から反核運動の理念まで、論者によって含意するものは多岐にわたる。それをふまえたうえで、本書ではあえて、「ヒロシマ」を明示的に定義するという選択を採らない。むしろ、個々のメディアは被爆体験から何を導こうとしたのか

それを「ヒロシマ」という言葉で指示する。「ヒロシマ」に明確な定義を付与し、その系譜を追うこともそれなりに有効ではあるだろう。だが、定義を加えることによって、削ぎ落とされるものもあるのではないだ

うか。「反核の理念」のみに照準するのであれば、もしかしたら、「平和利用」や「加害」の問題、被爆体験論との軋轢などが見えにくくなるかもしれない。むしろ、ここでは、「被爆体験に何を読み込み、そこからいかなる記憶や未来像が紡がれようとしたのか」を「ヒロシマ」という言葉で言い表した。そのうえで、さまざまなメディアがいかなる「ヒロシマ」を語ろうとしたのか、そこに何が欲望されたのか、それを突き動かした社会的な要因は何だったのか。これらについて考察を進めた。

<ナショナル/ローカル>

戦後日本や戦後広島は、どのような「ヒロシマ」を求めたのか。そこにはいかなる齟齬や軋轢があったのか。それは何に突き動かされていたのか。上記共著の各章では、新聞・サークル誌から映画、マンガ、観光といった大衆文化を見渡しながら、これらの問いについて論述し、戦後の「ヒロシマ」の多様な像と、その拮抗関係について、議論した。

「ヒロシマ」の語りが生み出されるうえでは、当然ながら、社会的な事象が大きく関わっていた。ストックホルム・アピール（一九五〇年）、第五福竜丸事件（一九五四年）やそれに伴う原水禁運動の隆盛、一九六〇年代以降の原水禁運動の分裂、スリーマイル島・チェルノブイリの原発事故（一九七九年・一九八六年）などは、その代表的なものだろう。だが、それらが個々のメディア（新聞、テレビ、雑誌、映画、マンガ、ツーリズム等）に同じ形で波及したわけではない。

原水爆をテーマにした映画であれば、『ゴジラ』（一九五四年）や『生きものの記録』（一九五五年）など、第五福竜丸事件を契機に製作されたものがある一方で、『長崎の鐘』（一九五〇年）や『原爆の子』（一九五二年）、『ひろしま』（一九五三年）など、占領終結期あるいは、その前から少なからず作られている。それに対し、広島修学旅行が社会的に定着するようになるのは、一九八〇年代に入ってからである。だとしたら、個々のメディアが「ヒロシマ」を語るうえで、どのような差異を孕んでいたのか。それぞれのメディアは、固有の「ヒロシマ」の語りをいかに生み出し、またそれはどのように変容したのか。

また、ナショナルな次元での「ヒロシマ」の語りと、広島におけるそれがいかに相違していたのか。その点にも目配りをする必要がある。上述のように、戦後初期の広島では、「八・六」は祝祭的な様相を帯びていたが、全国紙では必ずしもそうした傾向が見られたわけではない。第五福竜丸事件は全国的に大きく報じられ、原水爆禁止の輿論が盛り上がったが、広島のサークル誌では、「久保山〔愛吉〕氏が亡くなる数日前、夫を原爆

症で失った或る未亡人が『ほんとうに久保山さんが羨ましい』といった」ことが記されていた。国家的な援護・治療制度が未整備の状況にあって、広島の被爆者たちは、第五福竜丸事件の死者に羨望や鬱屈を抱くこともあったのである。

そこには、ナショナルな輿論（public opinion）と広島の言説との相違やズレを見ることが出来る。だとすると、「ナショナル」と「ローカル（広島）」には、そもそも、どのような「ヒロシマ」言説の差異が生じていたのか。そして、そこにはいかなるひずみを見出せるのか。

本研究は、こうした個別メディアの力学とナショナル・ローカルのねじれに着目しながら、「ヒロシマ」像の相違やその背後にある社会的磁場を読み解いた。

<政治主義・加害・平和利用>

「ヒロシマ」のポリティクスを読み解くうえで、政治主義と体験の関係性も、視野に入れる必要がある。ともすれば、被爆体験と反戦平和・原水禁の政治主義は親和的なものとして捉えられる。だが、先述のように、両者のあいだに齟齬が見られることも、決して少なくはなかった。

一九六〇年代半ば以降、原水禁運動内部では、ソ連・中国の核実験への評価をめぐって、共産党系と社会党・総評系とが非難の応酬を繰り返していた。そこで自らの体験が蔑にされていると感じた被爆者たちも多かった。そうしたことは、何もこの時期に限るものではない。広島のサークル誌『われらの詩』では、一九五〇年の朝鮮戦争勃発以降、近親者の死を悼む切実さが背景に退き、「反戦」の政治主義標が際立つようになった。それ以降も、「原水爆禁止を中心に据え」ねばならないという主張が、「あんなむごたらしい地獄絵図なんか、もはや見たくも聞きたくもない」という当事者の心情を押さえつけることは、珍しくなかった。

被爆体験と「核の平和利用」志向の結びつきも、また複雑さを帯びていた。昨今であれば、被爆体験と反原発は調和的なものに見えるかもしれないが、上述のように、かつては必ずしもそうではなかった。広島ジャーナリズムでは、「軍事利用」には批判的でも、「平和利用」には好意的な議論が多く見られた。原水禁運動が高揚していた一九五〇年代半ばにおいてさえ、そうであった。かつ、「平和利用」への憧憬は、被爆体験が生々しいものであったがゆえに語られた。原子力平和利用博覧会（一九五六年）や広島復興大博覧会（一九五八年）において、原子力科学の「未来」を謳った展示が原爆資料館（広島平和記念資料館）でなされたのは、それを象徴するものであろう。こうした議論は、広島のマ

ス・メディアばかりではなく、サークル誌・同人誌でもしばしば見られた。では、そもそも、被爆体験はなぜ「平和利用」と接続し得たのか。それはいつ、いかなる社会背景のものもとで成立し、また、いつから両者は乖離を見せるようになったのか。

「ヒロシマ」の語りと加害責任の問題も、微妙な緊張関係を帯びがちだった。広島は、第五師団や第二総軍司令部が置かれるなど、戦前期において日本有数の軍都であった。にもかかわらず、「ヒロシマ」をめぐる言説において「加害」の問題が前景化するには、戦後少なからぬ歳月を要した。

広島では、平和記念公園や原爆ドームなど、総じて中島地区に原爆遺構・モニュメントが集約されている。広島中心部にほど近いこれらの地域は、戦前期・戦時には家屋や商店がひしめいていたが、いまや、かつての人々の生活の息遣いは消え去り、「平和」という戦後の価値観が前景化している。それらは、広島観光の大きな柱になっているわけだが、同時に、「加害」の問題を見えにくくする側面もあった。もっとも、ベトナム反戦運動が隆盛し、また、在韓被爆者の存在が顕在化した一九六〇年代末以降、「被害」に閉じた「ヒロシマ」の語りはしばしば批判にさらされたが、一九八〇年代の広島修学旅行ではその問題が忌避されることもあった。

では、政治主義や「加害」、「平和利用」の問題が絡まりながら、「ヒロシマ」はメディアにおいてどう語られてきたのか。それは時代によっていかに変容し、また個々のメディアにおいて、いかなる差異を孕んでいたのか。このような問題意識のもと、本書ではナショナルあるいはローカルなメディアにおける「ヒロシマ」像を多角的に検証した。

なお、「ヒロシマ」関連以外でも、各自、グアム、沖縄、長崎等についても研究を重ね、研究会等の場でも議論を重ねた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

上杉和央「軍港都市と近代の文化遺産 舞鶴の「赤れんが」」『京都府立大学学術報告(人文)』2011年、1-16頁、63巻、査読無

山口誠「修学旅行をめぐるツーリズム研究」『二十世紀研究』12号、2011年、1-19頁、査読無

福間 良明「「広島」「長崎」の論争とロー

カル・メディア--「被爆体験」をめぐる饒舌と沈黙(特集 論争の場としてのメディア)」『メディア史研究』2011年、37-54頁、29巻、査読有

福間 良明「「戦争体験」という教養--「わだつみ」の戦後史」『史林』93(1)、2010-01、163-196頁、査読有

〔学会発表〕(計1件)

山口誠「若者とメディアの関係史」日本観光研究学会関西支部大会(招待講演)、2012年5月14日、日刊工業新聞社大阪支社(大阪府)

〔図書〕(計3件)

福間良明・山口誠・吉村和真『複数の「広島」:記憶の戦後史とメディアの力学』(青弓社、2012年6月)(編者のほか、上杉和央、杉本淑彦など計8名による共著)、13-70頁

上元・福間良明編『戦争社会学ブックガイド』(創元社、2012年3月)68-78頁、120-122頁、140-144頁、190頁、192-200頁、231-233頁、243-245頁、289-290頁

福間良明『焦土の記憶』新曜社、2011年(そのうち、第二部「被爆体験と「広島」「長崎」の戦後史」:219-397頁)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

6. 研究組織

(1)研究代表者

福間 良明(Fukuma Yoshiaki)
立命館大学・産業社会学部・准教授
研究者番号:70380144

(2)研究分担者

杉本 淑彦(Sugimoto Yoshihiko)
京都大学大学院・文学研究科・教授
研究者番号:30179163

山登 義明(Yamato Yoshiaki)
京都大学大学院・文学研究科
・非常勤講師
研究者番号：30456818

上杉 和央(Uesugi Kazuhiro)
京都府立大学・文学部・准教授
研究者番号：70379030

吉村 和真(Yoshimura Kazuma)
京都精華大学・マンガ学部・准教授
研究者番号：00368044

山口 誠(Yamaguchi Makoto)
関西大学・社会学部・准教授
研究者番号：80351493